イタリア学会 第73回大会 プログラム 2025年11月15日(土) 京都大学 (吉田キャンパス)

会場 京都大学 吉田キャンパス 本部構内 文学部校舎2階 第3講義室

- ◆ 開催校挨拶 10:00 ~ 10:15
- ◆ 研究発表 I 10:15 ~ 12:00

10:15-10:45

1. ガブリエーレ・ダンヌンツィオ著『死の勝利』とその邦訳における 参照表現の戦略

発表者:ガブリエーレ・カミッレーリ(大阪大学)

司会:村松真理子(東京大学)

◆ 休憩 10:45 ~ 10:50

10:50-11:20

2. ダンヌンツィオの第一次世界大戦における航空隊での活動 発表者: 渋江陽子(京都産業大学)

司会:村松真理子(東京大学)

◆ 休憩 11:20 ~ 11:25

11:25-11:55

3. ヴィーコ『新しい学』における市民神学:ウァッロからの概念転用と その意図

発表者:藤井祐夢(京都大学) 司会:菅野 類(愛知県立芸術大学)

- ◆ 休憩 12:00~13:30 (評議会:別室にて)
 - ◆ 総会 13:30 ~ 15:00
 - ◆ 休憩 15:00 ~ 15:30

◆ 研究発表Ⅱ 15:30 ~ 17:10

15:30-16:00

4. 『フィアンメッタの哀歌』の倫理的解釈:「運命/偶運」、「罪」、「賢明さ」の 分析を通して

発表者:田中真美(京都大学) 司会:徳橋 曜(富山大学)

◆ 休憩 16:00 ~ 16:05

16:05-16:35

5. フランチェスコ・ペトラルカの書簡編纂における「揺らぐ他者」の発見と 自我形成

発表者:飯嶌剛将(大阪大学)

司会:藤谷道夫(慶応義塾大学 名誉教授)

◆ 休憩 16:35 ~ 16:40

16:40-17:10

6. 「ヴェローナの謎歌(Indovinello veronese)」の謎:出だしの se pareba boves の se について

発表者:鈴木信五(東京音楽大学 名誉教授)

司会:天野 惠(京都大学 名誉教授)

- ◆ 閉会の挨拶 17:10
- ◆ 懇親会 18:00 ~ 20:00

会場:カンフォーラ(吉田キャンパス 本部構内)

ガブリエーレ・ダンヌンツィオ著『死の勝利』と その邦訳における参照表現の戦略

ガブリエレ・カミッレーリ(大阪大学)

ガブリエーレ・ダンヌンツィオ (1863 ~ 1938 年) のデカダンス小説『死の勝利』 (1894 年) は、初版刊行時からヨーロッパで高い評価を得ており、日本でも上田 敏による抄訳を機に比較的早期に紹介された。生田長江による完全翻訳版 (1913 年) から脇功訳 (2010 年) まで約 100 年に及ぶ翻訳史を持つ作品である。しかし特に戦前期の翻訳は、フランス語・英語・ドイツ語などの中間言語からの重訳が多く、イタリア語原典から直接訳されたものはごく少ない。また、本作品が日本近代文学にもたらした影響に関する研究は多いものの、翻訳と原作の文体的差異に着目した研究は限られ、質的な分析にとどまっている。

そこで本研究は、作品に現れる共参照表現を分析対象とし、文体的特徴と翻訳戦略を定量的に明らかにすることを目的とする。翻訳においては、原文における暗黙的な参照関係が代名詞などの追加により明示化される傾向が知られているが、その頻度や分布は文体やジャンル、目標言語の慣習にも影響される。イタリア語も日本語も共に pro-drop 言語であるが、前者は動詞の活用形による人称・数の一致(agreement)に基づき主語が省略される場合が多く、談話的・構文的制約がゼロ照応の使用を制限する傾向がある。一方、日本語のゼロ照応は文脈の話題性(topicalization)、談話上の連続性、また共感性といった要素に基づいて成立するという仮説が提唱されている。

本稿では、原作と 1913 年から 2010 年に刊行された 8 種類の日本語訳(石川戯庵 1913 年、三上於莵吉 1921 年、矢口達 1927 年、生田長江 1928 年、原田謙次 1939 年、岩崎純孝 1958 年、野上素一 1961 年、脇功 2010 年)を用いて文レベルの並列コーパスを構築した。全てのテキストは人文学分野におけるデータ構造化の国際標準である TEI-XML に準拠してエンコーディングした。文以外にも段落、会話、内面独白、書簡などのテキスト領域を XML タグで区分した。さらに各 TEI-XML ファイルに対し、参照表現のアノテーションを追加した。各参照表現には、対象となる実体名、前方参照・後方参照の種別、品詞情報および係り受け関係を属性情報として付与した。その後、TEI-XML で対応付けられた文単位の

アライメント情報に基づき、対応文間の参照表現を抽出し、アルゴリズムによって同一の実体を指す表現同士のペアリングを行った。

このデータを基に、まず原作における参照表現の分布と各訳書との比較を定量 的に行い、翻訳における参照表現の変容パターンを明らかにする。原作の分析で は、参照表現の品詞別割合、文あたりの参照密度、参照表現の連鎖パターン、最 後の明示的照応からの距離、さらには地の文、会話文、内面独白など文書の箇所 による特徴を調査した。邦訳の分析では、再帰代名詞、固有名詞、普通名詞、限 定詞、人称代名詞、ゼロ照応といった原作の各参照表現がどの保持、明示化、あ るいは省略されるのかを調べた。さらに、参照表現の変容を引き起こす要因を定 量的に分析するため、ロジスティック回帰を用いた多クラス分類モデルを実装し た。モデルでは原文と訳文の文長や品詞、係り受け、文の種類、前後の文脈情報 を説明変数として用い、参照表現の翻訳パターンを予測した。その結果、翻訳ご との分類精度は平均して約78~85%を達成し、安定した性能を示した。回帰分 析からは、原文の品詞と訳文での品詞の対応性(特に固有名詞と普通名詞)は高 く、翻訳者が原文の構造をある程度忠実に再現していることが確認できた。一方、 代名詞やゼロ照応は翻訳者や翻訳の時代により再現率にばらつきが大きく、文体 的特徴や目的言語の影響が示唆される。本分析を通じて、訳者が選択する翻訳戦 略には時代的傾向や起点言語の違いが明確に反映されており、翻訳文体研究に新 たな知見をもたらすことが期待される。

ダンヌンツィオの第一次世界大戦における 航空隊での活動

渋江陽子 (京都産業大学)

詩人ガブリエーレ・ダンヌンツィオ(1863-1938)は、イタリア王国における 航空史に足跡を残した。それはどのような足跡だったのだろうか。飛行機の黎明 期であった 1909 年に執筆、翌年に発表した小説『イエスかもしれない、ノーか もしれない』では、飛行家を主人公とし、「飛行機」を表すためにラテン語由来 の velivolo という語を導入した。この新しい乗り物のプロモーターの役割を進ん で担っただけでなく、第一次世界大戦では偵察士として飛行機に乗り、その発達 の最前線にいた。

イタリアの航空史において重要な場所の一つはローマ東部のチェントチェッレである。まだここが野原であった 1909 年 4 月、ライト兄弟の兄ウィルバーがアメリカからやって来てライト機で飛行した。このときイタリアは初めて飛行機を購入したのである。ウィルバーは二人のイタリア人に飛行訓練を施したが、その二人はダンヌンツィオに大きな影響を与える。その一人、海軍のマリオ・カルデラーラ中尉は、同年 9 月にブレッシャで国内初の国際飛行大会が開催されたとき、競技後に詩人を乗せて 8 分程飛んだ。この飛行によって彼は飛行の感覚を知ったのである。もう一人の陸軍工兵のウンベルト・サヴォイア中尉は、大戦中に SVA (ズヴァ) 機を設計する。同機は詩人の戦争期の活動を決定づけることになる。

当時の飛行機は木製羽布張りであったが、ダンヌンツィオはこの不安定で危険な乗り物に深く魅せられると同時に兵器としての可能性を見出していた。

1882年からイタリアはドイツ帝国、オーストリア=ハンガリー帝国と三国同盟を締結していたが、イタリア系住民が多数住む領土をオーストリア支配下に残していたことから、その領土を回復すべきであるという主張は根強くあり、ダンヌンツィオもそのような論者の一人であった。1914年7月末に始まった戦争を彼は領土奪還の機会として捉え、オーストリアを敵として参戦することを早くから主張した。当初、中立を宣言していたイタリアは、1915年5月、同盟を抜けてオーストリアに宣戦布告して大戦に参戦した。ここに、ダンヌンツィオの領土奪還の理念と飛行機が結びつくのである。

彼は陸軍将校となり、さらに陸軍と海軍の両方で活動する許可を得て、特に両軍の航空隊での活動に力を注いだ。1915年8月には海軍航空隊の飛行艇でオーストリア領トリエステ上空を、9月には陸軍航空隊の飛行機でトレント上空を飛んで、イタリア系住民へ向けたメッセージの入った袋を落とした。

同年秋にはカプローニ爆撃機を知る。この爆撃機を設計・開発したのは 1910年にミラノで飛行機製作会社を興したジャンニ・カプローニである。彼はオーストリア領トレンティーノ地方生まれであったが、その地域はイタリアの領土となるべきだという信念から大戦中もミラノに留まって飛行機を作り続けた。その信念を共有するダンヌンツィオは戦況を有利に運ぶための兵器として爆撃機に大きな期待をかける。彼は 1917年春には爆撃機中隊に異動し、その活用に関する意見書を陸軍参謀総長に提出する。夏にはオーストリア海軍の基地のあったポーラ港への爆撃を、秋にはカッタロ港への爆撃を計画し、また実行した。ウィーンまでの飛行もカプローニ機で行うことを考えていたが、「ウィーン飛行」は 1918年8月、サヴォイアが設計者の一人であった SVA機によって実行された。この機は、戦後の 1920年、詩人が発案した「ローマ・東京間飛行」にも用いられる。この長距離飛行の出発地はチェントチェッレ飛行場であった。

特権的な立場で航空隊に関わったダンヌンツィオの活動は、急激に発展を遂げた飛行機の歴史の最先端を反映している。詩人は時代に先駆けてヴィジョンを描き、それを具現化していった。本発表では、彼の航空隊での活動を辿り、SVA機とカプローニ爆撃機という大戦期を代表する飛行機との関わりを、その研究史に基づきながら考察していきたい。

ヴィーコ『新しい学』における市民神学: ウァッロからの概念転用とその意図

藤井祐夢 (京都大学)

ジャンバッティスタ・ヴィーコ(1668-1744)の『新しい学』は、18世紀イタリア思想を代表する著作として知られている。デカルト哲学が広まり、普遍的で不変の真理に価値が置かれていた当時、ヴィーコは「人間は自らが作り出したものを真に理解しうる」と考え、歴史・法・言語などの探究に向かった。その過程で、彼は、人間が常に合理的な判断を下してきたのではなく、その思考には想像力に基づいた非合理な側面が多分にあることを明らかにした。そして、個々の人間の非合理な行動が全体として秩序を形成している事実を前に、彼はその背後に神の摂理が介在していると認めざるを得ない、と主張する。

ヴィーコは、この探求の成果である〈新しい学〉の主要な側面の一つを、「神の摂理についての理性的な市民神学」(Teologia Civile Ragionata della Provvedenza Divina)と説明する。この名称を採用するにあたりヴィーコは、アウグスティヌス『神の国』を通じて知った古代ローマの碩学ウァッロが提示した神学の三区分(詩的・自然的・市民的)に明確に言及する。彼はウァッロの区分を「真実を伴っていない」と批判したうえで、異教徒においては詩的神学と市民神学が同一であったと論じ、その概念を解体・再構成してみせた。

しかし、この名称の採用には一つの問いが伴う。ヴィーコがアウグスティヌス『神の国』を通じて知ったウァッロの「市民神学」とは、本来、特定の国家の祭儀や神話に関わるものであった。それに対し、ヴィーコのそれは、全人類史を貫く神の摂理を解明する普遍的な知の体系である。この明確な断絶にもかかわらず、あえて同じ名称を用いた彼の意図とは何か。この概念の意図的な「転用」と「再定義」のプロセスを問うことは、ヴィーコの思想の全体像を理解する上で重要な課題となる。

この問いを解明するため、本発表では、ヴィーコが『新しい学』の中で用いる「神学」という言葉の多層的な用法に分析の焦点を当てる。具体的には、まず、〈新しい学〉の分析的枠組みとしての「市民神学」(=ヴィーコ自身の神学)と、その分析対象であるウァッロの「市民神学」や「詩的神学」といった歴史上の諸神

学とを区別する。そのうえで、ヴィーコが後者(歴史上の諸神学)をどのように 記述し、その発生の起源や歴史的役割をいかに規定しているのかを、『新しい学』 のテクストに基づき詳細に検討する。この比較分析を通じて、ヴィーコ自身の「市 民神学」が、彼が分析した歴史上の諸神学といかなる断絶と連続性のもとに構想 されたのかを明らかにし、その意図的な転用の意味を考察する。

分析の結果、ヴィーコが「市民神学」という言葉を意図的に転用したのは、自らの学問の役割を、人類史の黎明期における「神学詩人」たちの役割になぞらえるためであったことが浮かび上がる。ヴィーコによれば、最初の神学詩人たちは想像力から詩的神話(=古代の市民神学)を生み出し、それによって人々に秩序と道徳を与え、最初の市民社会を形成した。ヴィーコは、社会を形成し、導くという神学の根源的な役割にこそ、ウァッロの分類を超えた本質を見出していたのである。

結論として、ヴィーコが自らの学を「市民神学」と呼んだのは、彼自身が、理性の時代における新たな「神学詩人」たらんとしたことの表明であったといえる。彼の「理性的な市民神学」は、想像力に代わって理性と学問を用い、人間社会を支える神的な原理を解き明かすことで同時代の人々を教化し、社会をより善い方向へ導こうとする、壮大な実践的・教育的プロジェクトだった。この考察は、ヴィーコの学問が単なる歴史分析に留まらない、深い実践的意図を内包していたことを示すものである。

『フィアンメッタの哀歌』の倫理的解釈: 「運命/偶運 |、「罪 |、「賢明さ | の分析を通して

田中真美 (京都大学)

本発表は、ボッカッチョの『フィアンメッタの哀歌』(Elegia di madonna Fiammetta)を、従来の「心理小説」的解釈に囚われず、倫理的著作として再解釈する試みである。19世紀から20世紀にかけての研究は、盲目的で気まぐれな「運命/偶運Fortuna」に翻弄される悲劇的女性像としてのフィアンメッタを強調し、彼女の内面についての描写を近代的心理小説の先駆けとして評価してきた。こうした見解には、本作の教育的・宗教的側面を軽視ないし無視する傾向がある。一方で20世紀後半以降、過度な脱コンテクスト化への反省を背景に、本作に「心理小説」としての側面を認めつつも、「範例」としての教育性を指摘する声が上がるようになった。本発表では、後者の見解を一部共有しながら、そこで指摘されてきた欺瞞に満ちた「運命/偶運」への注意喚起にとどまらない、より根本的な倫理的・教育的機能が本作に託されていることを明らかにする。発表者は、語り手フィアンメッタと回想内の過去のフィアンメッタの間の、視点や倫理的価値判断にみられる差異に注目する。そこでは、運命観と罪の意識、さらに語り手が読者に求める「賢明さ saviezza」の概念が手掛かりとして浮かび上がる。

まず、本作にみられる「運命/偶運」のテーマを検討する。『フィアンメッタ』において、過去のフィアンメッタは自らの不幸について、その原因を「運命/偶運」の女神の気まぐれに帰しつつ嘆く。こうした構図は「哀歌 elegia」の伝統に違わない。ただし、『フィアンメッタ』においてその苦悩と嘆きを報告する語り手は、必ずしも「運命/偶運」に対する見解をかつてと一にしているとは言えない。『デカメロン』や『神曲註解』といった後年の著作においては、盲目的な「運命」像だけでなく、自由意志と理性を前提とする因果律的な運命観も認められる。「運命」は神の代理人として働き、人間が理性を失い欲望に流されるときにのみ不幸をもたらす存在として捉えられてもいた。そうした運命観は、『フィアンメッタ』と同時期の著作『愛の幻影』(Amorosa visione)にも垣間見え、当時のボッカッチョによってすでに意識されていたことが窺える。本作に翻ると、過去のフィアンメッタは盲目的な運命に翻弄される一方で、語り手の方は過去を距離化し、因果律的

な理解に基づいて自らの経験を語る立場にあると言える。

次に、罪と罰の観点でフィアンメッタ像を分析する。第5章以降、回想内の彼女は不義の恋という罪を自覚し、自らを「罪人」と呼び、その苦悩を「地獄の罰」と重ね合わせる。しかし同時に、その責任を「運命/偶運」に転嫁し続け、自らの自由意志を以て悔い改めることはない。その結果、神話や歴史の人物との比較で自らの不幸を殊更に強調するが、これはむしろ不幸の原因が自らの怠惰にあることを逆説的に示すものである。自由意志を行使せず苦しみにとどまる彼女の姿は、運命の犠牲者ではなく、善に向かう主体性を放棄した者として見ることができる。

さらに、「賢明な savio」という語の用法を分析することで、本作の倫理的意図がより明確になる。この語は前半では恋愛を成就させるための狡猾さとして、後半では徳に基づく理性的判断力として用いられており、意味が大きく転換する。特に第5章以降では、乳母や罪を自覚したフィアンメッタの発言において、「賢明さ」は悪徳から距離を取り、理性と徳に従う姿勢を指すようになる。最後に語り手が読者に求める「賢明さ」も、物語の奥に潜む倫理的教訓を洞察し、それを自らの行動指針として生かす知性を意味する。

このように見ると、『フィアンメッタ』は単なる恋愛悲劇ではなく、罪の認識と因果律を基盤とした倫理的物語として浮かび上がる。語り手は、自らの罪とその報いを「範例」として提示し、読者に自由意志による理性的判断と徳の選択を促す。これまでも高く評価されてきた心理描写のみならず、そこに倫理的意識が複層的に仕組まれた本作は、ボッカッチョの作家としての深い倫理的関心を反映したものとして捉え直すことができるのではないだろうか。

フランチェスコ・ペトラルカの書簡編纂における 「揺らぐ他者」の発見と自我形成

飯嶌剛将 (大阪大学)

本研究は、14世紀イタリアの詩人・人文学者フランチェスコ・ペトラルカによる書簡の編纂行為を、「揺らぐ他者」という観点から考察する。ペトラルカが『親近書簡集』(Rerum familiarium libri)をはじめとした、『韻文書簡集』(Epitstulae Metrice)や『カンツォニエーレ』(Rerum vulgarium fragmenta)などの作品を、もともと断片的な草稿から統一的な「書物(liber)」へと再構築した行為は、彼の文学および思想の核心に迫る上で極めて重要である。本稿では、この編纂行為の根底に、彼が古典古代の著者や自身の過去のテクストに見出した「揺らぐ他者」が存在し、その発見と対峙が多層的な自我意識の形成と作品の複雑な構造に深く関与していることを明らかにする。

ペトラルカの編纂意識を決定づけた重要な契機は、1345年のヴェローナにおけるキケロー書簡の発見である(Cfr. Santagata (2004: 36-37))。この発見の意義として本研究が特に着目するのは、ペトラルカ自身が受けた内的衝撃である。彼が発見したテクストにおいて見出したのは、理想的なストア派的賢人像ではなく、苦境のなかで不安を吐露し、時に友人を非難するなど、人間的な弱さと矛盾を抱えたキケローの姿であった。

この理想像の崩壊により、ペトラルカは複雑な感情を抱くことになる。彼は弱々しいキケローの文体に強く魅了されつつも、その考えの一貫性の欠如にはしばしば不快感を覚えたと告白している(Fam. I, 1, 42)。この経験を通じて彼は、キケローを単なる崇拝や模倣の対象としてではなく、批判と共感を伴う対話の相手として再認識することとなった。このような「揺らぐ他者」との対峙は、後のセネカへの態度にも見られるように(Fam. I, 1, 43)、ペトラルカにとって新たな文学的実践となり、自らの内面を探求する重要な契機となった。

さらに他者のテクストに見出した「揺らぎ」は、ペトラルカ自身の過去の著作への再評価を促すことになる。彼は膨大な草稿を整理する過程で、過去の自己が現在の自己と相容れないほど雑然かつ多様で、混沌とした様相を呈していることに気づく。ペトラルカは、自身の過去の作品の一部を「自分自身でさえほとんど

認識できない」と述べ、その原因をテクスト自体の変化ではなく、自分自身の内面が変化したためであると分析している(Fam. I, 1, 5)。この過去の自己が現在の自分にとって一種の「他者」として立ち現れたことにより、彼は自己を一貫した単一の存在ではなく、時間の中で変転する思想や感情の複合体として認識するに至った。この認識こそが、多面的な自己を統一的な「書物」として再構成する文学的試みにつながっていく。

本研究は、ペトラルカにおける編纂行為を「揺らぐ他者」との対話として分析することで、彼の自己表出戦略や、近代的自我意識形成の過程について新たな視点を与える。これにより、「古典復興の父」という側面にとどまらず、自己の内なる矛盾との格闘を文学的創造の源泉とした、近代的自我意識の先駆者としてのペトラルカ像をより深く理解することが可能となるだろう。

参考文献

Santagata, M. 2004 I frammenti dell'anima: storia e racconto nel Canzoniere di Petrarca, Bologna, il Mulino.

「ヴェローナの謎歌(Indovinello veronese)」の謎: 出だしの se pareba boves の se について

鈴木信五(東京音楽大学 名誉教授)

「ヴェローナの謎歌」は、イタリア人の手によって8世紀末~9世紀初め頃に書かれた1行余りの文字列に過ぎないが、これは、ある写本の余白上方に別途記された落書きのようなものである。写本自体は8世紀初頭にスペインで編纂された祈祷書で、世紀末にはヴェローナに到達していたらしい。問題の文字列を単語ごとに分かち書きすると、次のようになろう。

se pareba boves alba pratalia araba 「牛を追い、白い畑を耕し、 & albo versorio teneba & negro semen seminaba 白い犂を持ち、黒い種を蒔いていた」

ここに使われている言語は、書き手本人の意識がどうであったにせよ、北イタリアの俗語の性格をかなり反映したものだと言えよう。この謎歌は、上の分かち書きのとおりなら、冒頭の se は、所有の与格(dativo possessivo)あるいは心性与格(dativo etico)の再帰代名詞と取って、「自分の(ために)牛を追っていた」と解釈するのが一般的である。この謎歌は、表面上は農耕作業を描写しているが、全体をメタファー(metafora)の手法によって「書くという行為」にずらすことにより(牛→指、白い畑→羊皮紙、白い犂→鵞ペン、黒い種→インク)、「書き手」という答えを求めるなぞなぞである。se に続く半過去 pareba の語尾 -eba に関しては、現在では -eva が -ava の代わりに使われる地域は限られているものの、かつては(ヴェローナも含めた)ヴェネト地方一帯に -ava(あるいは -aba)のヴァリアントとして広く使われていた可能性が否めない。そして、同地域では、今なお動詞 parar に「(家畜を)追う、駆る」の意味が根強く残っている。

話を与格の se に絞ろう。これを接語代名詞(pronome clitico)と取った場合、中世ロマンス諸語の動詞で始まる文では、接語が動詞の後ろに回るとする Tobler-Mussafia の法則に抵触してしまう。そこで、se を代名詞のまま解釈しようとする立場に限っても、いくつかの仮説が立てられている。たとえば、構文上 se parebaをラテン語的語法(latinismo)とみなす立場がある。なるほど、ラテン語の人称

代名詞(再帰も含む)は文の先頭に立てるかもしれない。しかし、形態上から見れば、ラテン語の与格 sibi ではなく、与格・対格が合流した se に置き換わった俗語的語法(volgarismo)であるという矛盾を夢んだ分析に陥ってしまう。これに対し、近年、se が接語と強形代名詞(pronome libero)の中間的な性質をもつ弱形代名詞(pronome debole)であるとする仮説も出てきている。弱形代名詞の例としては、現代イタリア語の与格(前置詞 a を伴わない)loro が考えられる。たとえば、「決して彼(女)らに全部は言うまい」を表すには、(1)non gli dirò mai tutto;(2)non dirò mai loro tutto;(3)non dirò mai tutto a loro の 3 通りがあるが、イタリックの代名詞のうち、(1)が接語、(3)が強形であり、その中間にあるのが(2)の loro、つまり弱形代名詞である。この弱形は強形と同じ形式をもち、こうした形態上の関係は、古イタリア語(13 世紀フィレンツェ方言)においても変わらない。逆に、「ヴェローナの謎歌」の se は、一般に北イタリアにおける対格・与格の接語と同形であるが、弱形が接語と同形という関係はフランス語にも見られるし、現段階では、se を弱形代名詞と解釈するのがいちばん妥当であるように思われる。

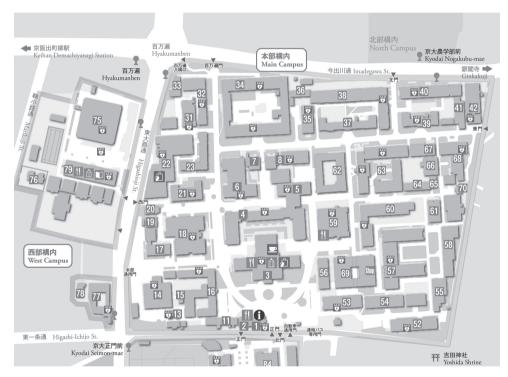
大会会場

〒606-8501 京都府京都市左京区吉田本町

京都大学 吉田キャンパス本部構内 文学部校舎 (地図内 8) 2階 第3講義室 *第3講義室は南側の離れ棟です。渡り廊下をご利用いただくか、南側外階段から直接お越しください。

控 室

文学部校舎(地図内 8) 2階 第3演習室



*当日、会場がわからないなどご不明な点がありましたら、運営スタッフ(Tel 080-3807-5285、090-1144-3941)までお問合せください。

アクセス

京阪電車「出町柳」駅より徒歩 15分 京都市バス「百万遍」バス停よりすぐ



昼 食

大会当日、西部構内の生協食堂(カフェテリア ルネ 地図内 79) は営業しています。その他、キャンパス周辺に各種飲食店やコンビニがございます。

懇親会のご案内

日時: 大会当日 18 時から 20 時まで

会場:カンフォーラ(本部構内 時計台前 地図内 2)

会費: 6,000円(学生4,000円)

ご家族同伴の場合、会費は大人 6,000 円、こども小学生以上 4,000 円、乳

幼児無料とします。

同封の振込用紙で10月17日までにお払込ください。

当日現金でのお支払いはご遠慮ください。お払込後のキャンセルもご遠慮願います。

*お支払いいただいていた懇親会費に余剰金が出た場合は、これを学会への寄付として扱わせていただいたうえで会計報告に明記いたします。

イタリア学会

Associazione di Studi Italiani in Giappone

〒 603-8555 京都市北区上賀茂本山 京都産業大学 第 2 研究室棟 542 内田研究室内 E-mail: studiitalici@gmail.com URL: http://studiit.jp/